

第8回高知県社会教育委員会（平成24年8月1日～平成26年7月31日任期）会議概要

平成26年7月25日（金）11:00～13:20

高知県庁西庁舎 3階 南北会議室

1. 開会（11:00～11:05）

- (1) 高知県社会教育委員会委員長挨拶
- (2) 高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶

2. 議事（11:05～13:20）※休憩12:00～13:00

（答申）

「県民の力を育み、絆を創出するための社会教育の在り方」について

【事務局より説明】

（委員長）

最後に概要版を作成することで整理したが、7回目までの協議を経て少し付け加えたところもある。全体を通して質問等があれば出してもらいたい。また、それぞれの委員の皆さんにとっても大事な部分があると思うので、答申と関連させながら話してもらいたい。

（委員）

答申をまとめる作業は大変だったと思うが、内容を読むと、方策1から4に私たちの言いたいことがよくまとめられている。

自分自身としては、市教委でも取り組んでいるが、やればやるほど課題に直面するので、社会教育に対する理解が思うように得られていないところがあると感じる。この方策の中にもあるように、学校教育においては、社会教育主事有資格者の配置、また、各市町村職員の社会教育主事講習の受講等について、もう一度基本に立ち返って考えることが大事だと思う。

社会教育をよく理解してくれている人には話が入りやすいが、そうでない人には、いざやろうとする時になかなか理解してもらえない。社会教育は、呼べばみんなが来てくれるわけではなく、いろいろな方策を進めていくためには、人と人との関係や柔軟な考え、行動ができることがとても大事である。そういう意味では柔軟な発想に立つ、社会教育に対する一番基本の部分、事例を通して分かっている人が必要だと思う。

（委員長）

まず、社会教育についての理解を深め、広げていくということが大事ではないか。また、社会教育主事の研修や資格についても原点に帰って、きちんとやれるような体制をつくる必要がある。

（委員）

私たちの会でも、社会教育主事を置いて欲しいという要望が強い。21市町村には有資格者がいるが、ぜひ全ての市町村に置いてもらいたい。

（委員）

みんなの力で、子どもたちのためにずっと作り上げてきた財産をきちんとつなげてもらいたい。そういう意識を持った管理職や教職員と地域が深くつながり、ずっと継続していくようなことができないかと思う。

子どもたちや保護者はいずれ卒業していくが、次のPTAの担い手を育成しておけば、PTA活動は脈々とつながっていく。同時に校長、教頭を中心としてチームをつくり、地域の人たちとともに、学校が地域の核となり、地域コミュニティを形成していった時に、地域の人を中心となって活動している学校区では、それが脈々とつながっていく。しかし、学校主導の場合には、管理職が代わったら、そこで途切れてしまうことがある。社会教育主事の資格を持っている

人やそういう幅広い視野でやっている人と、学校現場だけでずっと順調に来た先生の意識は違ってくる。人事も大事なことだと思っている。

(委員長)

社会教育は学校教育と違って、途中で切れてしまうことがある。人が代わることによって良くもなり、悪くもなったりするので、継続していくことが本当に難しい。住民はずっとその地域に住み続けていくわけだが、社会教育主事、あるいは学校の教員たちが代わってしまうことによる問題は非常に大きい。

(委員)

この答申を読んだとき、「この答申が予算を伴った施策に反映されることを強く望みます。」という、最後の1行がとて嬉しかった。答申は、委員会が学びの場だけでなく施策の提言の場であり、その施策が県民に生きるためにはそれが行動化されないといけない。そのためには理屈だけでは駄目であり、予算を伴った形でなくてはならない。社会教育主事の配置や主事講習の充実が大切なことは分かっているが、その負担は誰がするのとなった時に、派遣するお金も無く人員もいない。さらに学びの場の安全については、耐震にもなっていない公民館の中で、バリアフリーも全然なくて使いたくても使えないような施設では、拠点づくり以前の話になってしまう。

それを越えていくためには、予算を伴った具体的な社会教育の施設や諸条件の整備と拡充が必要である。これができるといえるか、県民へ目に見える形の中で社会教育が還元できる、委員会の提言が還元できるかどうかにかかっている。だから、少なくとも向こう2、3年の予算は注視していかなければならないと感じている。

それと、具体的な内容ではないが、これをまとめ上げるのは本当に大変だったと思う。それをこれだけの形にまとめて上げてくれ、本当にありがたいということと同時に、まさに社会教育委員会そのものが私にとっては学びの場だったと感じている。

(委員長)

社会教育は条件整備が一つの核になる。しかし、お金がないので整備のことなど忘れられがちであるが、古い建物の中では、学ぶ意欲等はなかなか高まっていかない。そういった学びの諸条件の整備拡充という点も安全安心という点で大事である。

この後、どのように具体的な施策にもっていくことができるのか、そのための援護射撃というようなかたちで、この答申ができたと思っている。委員会や事務局には、この答申をうまく使ってもらいたいと思う。

(委員)

本当によくまとめていただいた。学校の方でも、地域社会との連携が重要なことは分かっているが、なかなか取り組めてない。ただ、答申の部分が現実になったらいいと強く感じている。

少し具体的なことを言うと、私は、この何年か2校ほど郡部の学校に勤務しているが、地域に人が少なくなっていると肌で感じている。今回の答申についても「県民の力を育み、絆を創出するための社会教育の在り方」についてというタイトルは、「地域」が頭の中にあるのではないかと思う。そのために学校教育がどんなことができるのかということ、今は高校も再編問題で揺れているが、その再編問題の資料を見てみると、市内の学校については生徒数に問題はないが、郡部校では、地域によっては1学年1学級で存続することもやむを得ないとされている。

ところが、現在勤めている高校についても、地域の状態をいうと、地域の中学生は各学年に240名前後の生徒がいる。本校は2学級規模の学校なので、240名の3割の生徒がそのまま進級すれば定員に達するということになる。ところが、現状は2割弱であり、今年度が48名、昨年度が43名なので1学級よりは少し越えて、2学級をギリギリ維持できている。

逆にいうと、生徒の約8割が高知市内などへ抜けているという実情がある。少なくなっている子どもたちが都会に出て行って戻ってほしいが、それができにくい状態なので、小・中そして高校も含めて地域との関わりをもっと強くして、地域の子は地域の学校で学び、地域の高校へ進学し、そしてさらには地元の高知大学へ進学というような高まりを、県としてしなくてはならない。地元をもっと強めるための社会教育のあり方、そして学校教育のかかわり方が必要だと思う。

正直、学校現場からいうと、学校の先生も忙しいので、学習指導要領に沿った授業をする中で、地域とかかわる社会教育の部分をどのように捻出するかというのは難しい。だから、一つの立りとして地域連携担当教員が学校内にスムーズに配置されたら、地域で子どもを育て、地域に残る、そしてグローバルな視点を持って地域を支えるたくましい人材の育成が実現していけると思う。

具体的には、高校での「総合的な学習の時間」をもっと地域密着型にしなければならないと考えている。本校では、1年生の時に仁淀川町、佐川町、越知町、日高村に行って、役場の産業振興課や観光振興課の人に話をしてもらう。2年生では、産業振興の地元産業にはどんなところがあるのかインターンシップに行く。そして3年生では、地元振興への提言をする。そのような3年間系統だった地域密着型の取組を「総合的な学習の時間」で始めてみたいと考えている。そのためには、地域連携のコーディネーターがいてくれたらスムーズに学校も動けると思う。

この答申の内容が、予算措置を伴って実現できれば大変いいと思うし、高知県の郡部の地域、そして高校は今がふんばりどころである。

(委員長)

高知大とも高大連携でやろうという話もあるが、もう既に動いている。高知県の課題はいろいろあるが、郡部の高校のあり方というふうに言い換えてもいいぐらいである。地元に残れる、あるいは残りたいと思う子どもをどう育てていくのが、高知県の教育の大きな課題である。そういう意味で、地域ぐるみで子どもを育てるといって課題が出てきている。

学校の話も出てきたが、NPOや市民活動、地域づくりなどについても盛り込んでいるが、その辺りはどうか。

(委員)

私も事務局を経験したことがあるので、一番最後を整理するのが大変さは理解出来る。また、「はじめに」の部分も読ませてもらったが、委員長にもまとめてもらい、本当にご苦労をかけたと思う。

内容については、前回と比べるとかなり読みやすくなり、私たちの思っていることがいろいろな方向性として入った計画になっていると思われる。これが答申としては最後になるが、逆に教育委員会としてはこれが出発点になる。これからどのように新年度予算も含めて具体的に実現していくのか。例えば、社会教育をやったことは、どこから始めてもかまわないということである。例えば、予算的にも今は産業経済振興のことにウエイトが置かれているので、心の豊かさの部分はややもすれば後回しになるという話になれば、そこは逆に、答申の1ページの原点に書いているように、心の豊かさを育てるの環境をつくったり高齢者まで全て巻き込むことで、家にもった人を社会教育との関係で外に出すことになり、どれだけ医療費の削減に効果があることかということをこちら側から打って出る。逆にそこから引き出していったら経済効果というのは、ここに書いていることからシュミレーションしていくと、結構、大きな額が出てくるはずなので、そういうことも交えながら説明していくと、その重要性を理解してもらい、かなりプラスになるのではないかと。

一見文化を扱っているように見える施設においても、最近はデイケアで来る人も増えてきた。そうすると福祉で、今までこもっていた人が外へ出て、ここへ来たら気が晴れるとか、今度また来ようかというように広がっていくことが健康づくりにつながっていく。

今回、1ページの中で、「社会教育の原点は、子どもからお年寄りまですべての人が心豊かに暮らすことのできる地域社会を創造していくこと」と書かれているが、実はここに戻って来ることは、すごく大事だと思う。私は今、文化関係に携わっているが、「文化とは何か？」という問いにはなかなか一律の答えが返ってこない。語源をたどっていくと、カルチャーは耕すというところから来ている。耕すということは、農耕で言ったら地方によって風土も違うし気候も違うと作る物まで違ってきて、食べる物も当然違ってくる。食文化が違ってきたらその他のいろいろなものが違ってくる。そういうところから入っていくと、文化とはその地方がいかにかに色彩を持ったものになるかということへ行き着いた。社会教育は登り口がたくさんあるけれど、逆に言うと、それだけ攻め方がたくさんあるということなので、答申内容の具体的な実現へ向けての健闘を期待している。

(委員)

私もこの社会教育の原点の部分を読ませてもらい、連合婦人会と健康づくり婦人会の両方が、こういったことに沿った活動をしているという勇気をもらいありがたかった。

(委員)

若者のサポートということでいろいろな会に出ていると、必ず言われるのは少子高齢化、過疎化、労働人口が減っていることである。しかし、実際に若者はいるわけである。その若者や子どもたちの力を十全に引き出して、一人ひとりが輝くような営みがあったら、もっとパワフルな地域づくりなり、高知県のいろいろなことができるのではないかな。では、引きこもりの人たちをどのようにしていくのか生涯学習課の取組の実践を読ませてもらったが、なかなか一筋縄でいく話ではないと感じた。一人の人間が少しだけ社会のレールから外れた時に、元へ戻すということにどれだけの力があるのか。やらなければいけないのだが、それは大変な時間とお金と、そして情熱がなければできない。引きこもりにならないために、子どもたちの多様性を尊重しながら、生き生きと学びの場でやっていくためには、社会教育の多様性が学校教育と結びついた時に、子どもたちが生きやすくなるのではないかなと思った。

今、学校教育や家庭教育の限られた空間の中で、子どもたちがすごく息苦しさを感じている。その息苦しさが中学校、高校と進んでいくに従ってだんだん狭められてきて、結局学校に行けなくなってくる。そして、学校を中退していく。職業に就いても辞めて、もう仕事に就けなくなっていく子どもたちや若者が増えてきている。そこを社会教育の力で、地域の中で、子どもの時から「お前は地域にとって大切な存在である」ということを発信させながら、いろんな行事に子どもたちが主役、脇役として参加していくことによって、その子どもたちの存在そのものを地域が評価していく。そういうような子育て、子育て支援というものを、これからもっと地域づくりの中に意識的に入れていかなければならないと感じた。

“生き抜く力”とよく教育の現場では言われが、その生き抜く力をどこで育てていくのかは、家庭・地域・学校との三位一体の中だと思う。地域の行事にかかわっていくなど、子どもたちを伝統文化の担い手や地域行事の参加者という形の中で、子どもを自分たちのパートナーとして扱っていく。

社会教育というのは、子どももお年寄りも成人も男も女もみんな同一線上に並んだパートナーであるという意識でこれから先やっていかなければならない。何々をしてあげるのではなく、ともに頑張ろう、ともにやっという姿勢がこれからの地域づくりの中に必要な視点ではないかなと思う。

(委員長)

社会教育の多様性を持つ人を育てる力を、今こそさまざまなところで利用できるのではないだろうか。くしくも最初のところで社会教育というものをもっと多くの人に理解してもらい、それを使ってもらおうというのが原点ではないかなという話があったが、今日の話は、多様性を持つ人を育てる力、経済とか文化とか少し異質のもののように見えるけれども、そこに共通して流れている考え方である。結果、回り回って全てに有用に働くというような機能がある。あるいは郡部の学校には、高知の中山間の課題というものにきちんと向き合える社会教育の価値というのがあるのではないだろうか。今日の話は、あらためて社会教育とは何なのかという意見を出してもらい、本当に大事な視点がたくさん出てきたと思う。そのことを背景に持ちながら、教育委員会に答申したいと思っている。

【休憩】

(委員長)

では、後半にうつります。本日、持ってきてもらった資料も何点かあるので説明をお願いしたい。先に、自治体、社会教育関係団体のことについて寺尾委員より発言をお願いしたい。

(委員)

以前、私たち婦人会は、「地域と歩む婦人会」とよく口に出して言っていた。行政も集会や事業があると必ず婦人会へ声をかけてくれていた。悪く言えば、婦人会は行政の下請けをしているとか言われたこともあったが、それほど頼り

にされていた。会議への参加など、会員に声をかければすぐに集まり、その度に会員同士の結びつきや地域の絆づくりにつながっていった。本当に婦人会が地域を支える大きな団体であると自負していた。

しかし時代が変化し、役員になる人がいないということで最近では休会や脱会などがあり、高知県連合婦人会も現在組織化されているのは25市町村で、9地区にしかない。そして私が現在所属している健康づくり婦人会も、所属をしているのは19で、休会、脱会が19市町村にあり、年々少なくなってきた。理由は、やはり役員のなり手がいないことで、もう少し首長が一押ししてくれるとか、組織づくりに力を貸して欲しい。それが地域活性化を与える一つの大きな要因ではないかと思っている。

(委員長)

この答申の最初の第1の学びの場を核にした地域コミュニティの形成の主な方策の③のところになるが、いわゆる自主的な学習活動を行う団体に対する支援である。あるいはその団体の再構築・再生といったものをもう少し促進していこうということがあるが、婦人会は地域とともに歩み、地域から信頼されてきた。改めて、そのような団体を市町村が中心となって援助していくような方策を積極的に提言していこうという中身になっている。

最近ではPTAに関しても全国的には新しい取り組みで、単に順番が回ってくるというのではなく、やりたい人がやれるような形に持っていこうと、いろいろな工夫がされてきている。高知県の婦人会、青年団等も今後どのようなことができるかを考えていく大変大事なところだと思う。

(委員)

青年団は婦人会と一緒に元気に活動していたが、急速に弱体化しており、団長も市役所の職員の人がなっているなど、大分変わってきた。

(委員長)

団体という言葉かどうか分からないが、サークル、NPO、何か自分自身が活躍できる、もう一つの場を求めていく強い想いはある。みんな孤立している中、青年団は、何かをしたいという思いはあるが、そこをつなぎきれていない感じがする。

(委員)

そういう面で言うと最初に帰るかもしれないが、社会教育主事などのように、コーディネーター的な役割をする人材がすごく大事であり、必要になってくると思う。地域にはそれぞれ特色があるので、その地域の実情をきちんと分析して、今地域にある力をきちんと評価しながら、どういう形だったらこの地域のこの力を結びつけて活性化させることができるのかという分析とコーディネートができる人材、そして新しい課題を提案できるような力を持った人材が地域に必要とされている。

やはり社会教育主事の各市町村への配置、そして各公民館にも資格を持った人たちがいれば、地域の新たな担い手づくりという、場所の核と人の核という2つの核ができる。そうなれば地域づくりというものがもっと進んでいくのではないか。

(委員)

社会教育主事の存在は本当に大きいと思う。

(委員長)

社会教育関係団体を、これから高知でどのように考えていくのかは、大きなテーマの一つである。今後も継続して考えていかなければならない。

それでは、資料の説明をお願いしたい。

(委員)

今回、社会教育委員として入らせていただいて、社会教育の根本的な課題を考える機会を得て、大変参考になった。香美市では、学力向上、基本的な生活習慣の確立、社会性の育成の3つを柱にキャリア教育を進めている。今回、キャリア教育に分かりやすい名前をつけることになり、検討委員に集まってもらい、最終的に決まったのが「よってたかって地域が育てる教育」である。これはみんなで子どもを支え、香美市を盛り上げていこうという趣旨である。“たかつ

て”というのは、余りイメージがよくないと言う人もいたが、要はみんなでやろうということである。そのことを周囲に説明するために作った資料が1枚目である。下は11月1日の土曜日に土曜授業とキャリア教育を重ねて、高知工科大・山田高校・地域・学校が一緒になって、「キャリアチャレンジデー」と名付けて、中学生の授業を工科大の講堂で行う紹介である。3枚目は企業の人たちが来てくれ、午前中は545人の一斉授業の後、31の企業や個人が3回授業を繰り返してくれるということで、生徒はこの中から3つ選んで学習するという内容になっている。それを支えるボランティアが各ブースに3人はいるので、全部合わせると150から200人ぐらいがかかわってくれ、中学生の活動を支えてくれるように組み立てた。PTAも学校支援地域本部の人たちも一緒になって取り組んでいる。

(委員長)

キャリア教育を進める、あるいは学校教育を進めていく上で、地域とのかかわりなしにできないという状態である。そういう意味で社会教育を分かっている人がいるのといないのでは、このキャリア教育の進め方も全然違ってきて、成果にも違いがあるかと思うが、まさに香美市方式で地域と連携してきた歴史があり、その上にキャリア教育があるという形になっている。

(委員)

山田小学校を支援している山田高校の生徒からも、アイデアがたくさん生まれてきている。運営にかかわってくれる人はたくさんいるので、上手に構成していきたい。

(委員長)

具体例としてできたことが一つのモデルになっていけばいいと思う。

それでは、高橋委員には私たちみんなで勉強させていただいたが、今日もまちづくりニュースの資料を持ってきてもらっているので紹介してもらいたい。

(委員)

それぞれの団体が記事を持ち寄り、編集委員会をしてやって、年間4回出すということで、これが最新号ということで持ってきた。時間があったら読んでもらいたい。

(委員長)

最初のタイトルが、芳原から被害者を出さないというドキッとさせる言葉だが、まさに主体的である。自分たちのところから被害者を出さないというまちづくりをしければ、こういう被害は減っていかないという強い意気込みを感じる。この言葉は案外きちんとやっていないと出てこない言葉だと思う。

それでは、短い時間だったが、後半の社会教育委員会を一旦閉じさせていただいて、事務局に戻したいと思う。

3 閉会

(1) 生涯学習課長補佐挨拶